

11. 定位脳手術における脳血流変化の SPECT による検討

望月 隆男 阿隅 政彦 高橋元一郎
金子 昌生 (浜松医大・放)
杉山 憲嗣 今村 陽子 龍 浩志
植村 研一 (同・脳外)
横山 徹夫 (同・手術部)

目的はパーキンソン病に対する定位脳手術の一つである Posteroventral Pallidotomy が脳血流に及ぼす変化を SPECT によって検討することであった。対象はパーキンソン病患者 5 名で ^{123}I -IMP を使用し SPECT を得た。撮像は手術前後で 3 回行った。得られたデータは肉眼での評価のほかに、ROI 設定により得られたデータに統計処理を加えた。PVP が施行された側の大脳半球の相対的な血流低下と反対側の小脳の血流低下が全例で観察された。統計学的有意差は術後 1 週間の反対側視床の相対的上昇と反対側小脳の相対的低下について観察された。また PVP による同側の大脳投射野の集積上昇は観察されず、同手術は安静時の同領域の血流を上昇させるものではないと思われる。

12. 慢性硬膜下血腫の検出における $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA 脳 SPECT の有用性

高山 輝彦 絹谷 啓子 辻 志郎
道岸 隆敏 利波 紀久 (金沢大・核)
木下 昭 木村 誠
(小松市民病院・脳外)

臨床的、および X 線 CT 検査で慢性硬膜下血腫 (CSH) が疑われ、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA 脳スキャンが施行された 20 症例 27 病巣 (男性 12 人、女性 8 人、平均年齢 66.2 歳) を対象に、X 線 CT、手術結果、脳スキャンの動態像、静態像、および SPECT 像を比較して、脳スキャン、および SPECT 像の有用性について検討した。脳スキャンの読影は 4 点評価で行った。対象には水腫 2 例が含まれ、したがって X 線 CT による CSH の正診率は 93% (25/27) であった。一方、脳スキャンの検出率は 88% (24/27) であった。病巣が片側性の場合、および両側性で左右差を認める場合の優位側では SPECT による評価は改善したが、両側性の場合の劣位側における改善は得られなかった。以上より、

脳スキャンは血腫および水腫の程度の評価に有用と思われた。

13. 頭蓋内悪性黒色腫の 1 例

—— ^{123}I -IMP, ^{201}Tl scintigram 像を中心に——

大河内幸子 石川 浩太 北瀬 正則
佐々木 繁 遠山 淳子 大場 寛
(名古屋大・放)
福島 庸行 高木 卓爾
(名古屋市立東市民病院・脳外)
大竹正一郎 今葦倍庸行 (同・放)

神経皮膚メラノーマに合併した髄膜悪性黒色腫症例に、 ^{123}I -IMP, ^{201}Tl 脳 scintigraphy を施行した。 ^{123}I -IMP は、20 分後像で大脳鎌左側に接した腫瘍部とその前方の髄膜播種部分に集積し、4 時間後像でさらに顕著となった。 ^{201}Tl は、腫瘍中心部と髄膜播種部分に著明に集積した。腫瘍/大脳比を腫瘍中心部と髄膜播種部分で求めた。 ^{123}I -IMP では腫瘍中心部で early ratio が 1.25, delayed ratio が 1.68, 髄膜播種部分で early ratio が 1.29, delayed ratio が 1.31 であった。 ^{201}Tl では腫瘍中心部で early ratio は 5.82 で、髄膜播種部分で 3.41 であり異常高値を示した。

14. 原発性肺癌の ^{201}Tl -SPECT: 気管支動脈造影との比較

大口 学 玉村 裕保 西川 高広
東 光太郎 谷口 充 興村 哲郎
山本 達 (金沢医大・放)

切除不能非小細胞肺癌 30 人に対し、放射線治療開始 1 か月以内に施行された ^{201}Tl -SPECT, 気管支動脈造影 (BA) を CT と比較検討した。原発巣はどの modality でもすべて検出された。縦隔リンパ節の陽性率は CT, Tl, BA 各々 86.7%, 76.7%, 90% であった。同側肺門リンパ節は各々、83.3%, 70%, 93.3% であり対側リンパ節は 6.7%, 10%, 26.7% であった。Tl-SPECT で低かったのは分解能によるものと思われ、また BA で高かったのは炎症性リンパ節腫大を陽性と判断したためと思われた。Tl-SPECT, BA はともにリンパ節転移の診断に、補助的有用性があるものと思われた。